――弁慶と牛若の立ち回り。
牛若は刀を抜かず、軽やかに大長刀をかわすばかり。
さんざん翻弄され、ヘトヘトになる弁慶。

弁慶　（荒い息で）この弁慶を、かほど手こずらせた者、お主が初めて。さぞや名のある武門の出と見た。どうか、名をお聞かせ願いたい。

牛若　盗っ人に明かす気はない。

弁慶　そう申されるな。この通り、頭を下げるほどに。

牛若　では、教えてとらす。我こそは、かつて平家一門に滅ぼされた源氏の棟梁・源義朝が末の子、牛若じゃ。

弁慶　源氏の御曹司にござったか！これは何たる失礼を。平に平に（ト地面に頭をこすりつける）

牛若　悪いと思うなら、刀を奪うは今宵限りといたせ。

弁慶　はッ！仰せの通りに。

――上手から並盛、大盛、山盛、平家の兵たち。

並盛　おお、あそこじゃあそこじゃ。

弁慶　加勢を連れて参ったか。御曹司、ここは手前にお任せあれ。

牛若　助けて貰ういわれはない。お前こそ早う逃げよ。

大盛　誰じゃ、貴様は！

山盛　こ奴の仲間か！

弁慶　仲間ではない。このお方の家来様じゃ。

牛若　おい、家来にした覚えはないぞ。

弁慶　まあ、細かいことは抜きにして。さ、お早く。

牛若　仕方ない。先を急ぐ身ゆえ、この場は任せた。

――牛若、橋を渡って、上手へ走る。

並盛　あ、待て！

弁慶　おっと、これより先へは一歩も通さぬ。どっからでもかかって参れ！

大盛　ええい、斬れ斬れ！

兵たち　おおッ！

――兵たち、弁慶を取り囲み、刀を構えた瞬間……幕が下りる。

政子　父上、ありがとうございまする。

時政　なーに、物は考えようじゃ。この先、平家の天下がひっくり返らぬとも限らぬ。さすれば今度は、頼朝殿が世に出る番。政子、そなたは源氏の跡継ぎを生む大事な身。夜露は体にさわる。ささ、早う屋敷へ戻ろう。

政子　はい、父上。では、頼朝様。

頼朝　ウム。

時政　頼朝殿、いやさ、婿殿。いずれ平家打倒の相談など、じっくりいたそうぞ。

頼朝　ははッ！

――時政と政子、下手へ去る。

頼朝　……思いがけぬ流れとなった。子供の話には驚いたが、お陰で時政殿が味方についてくれた。北条配下の武者は、およそ三百。平家を倒すには到底足らぬが、源氏再興の狼煙を挙げる火種とはなろう。伊豆に流され、十五年か。ようやく俺も、日の目が見れそうじゃ（ト不敵に笑う）

――頼朝の笑い声、続くなか……舞台暗転。